

重度知的障害のある子どもとの音楽活動における表出行動の促進に関する事例的研究

畠山 沙羅

I 問題

知的障害のある子どもは、親しい他者からの承認への願望と未知の人に対する警戒心や消極性を併せ持っており、知的障害のある子とかかわる上では、そのバランスを考慮する必要がある(前川, 2002)。知的障害のある子どもの中には、自閉的傾向を示す子どももあり(高岡, 2007)、障害が重複化しているため、土谷(2006)の言う「受動的・依存的な状況」になりがちであり、「共有する活動」をすることが難しいと考えられる。

鯨岡(2001)は、障害の重い子どもの表現しようという意図のない行動について、情動が外部に向かって表出されたものにすぎないが、かかわり手がそれを受け止めることがコミュニケーションの端緒になると述べている。このことから子どもと共有する活動の中でも、子どもの一見意図的でない表出行動や情動に伴う表出行動にも目を向け、それを受け止め、やりとりをしていく必要があると考えられる。

共有する活動の一つとして音楽活動が考えられる。音楽は、言葉がない段階や対象に対しての交流に有効であり、数ある音楽活動の中でも、楽器を介することで共同注意が成立しやすい(土野, 2006)。楽器の中では打楽器が情動を発散させる上で大きな力を発揮し(遠山, 2006)、鍵盤楽器は、押して音を出す楽器とも位置付けられ、演奏方法の多様性がある(土野, 2006)ことから、鍵盤楽器の本来の演奏方法とは別に、押したり、叩いたりする活動を行うことが表出行動を促進する上で有効であると考えられる。

また情緒が不安定になりやすく、ほかの子どもたちとのあいだに積極的な関係が得られにくいと考えられる子どもは、個人音楽療法が有効である(遠山, 2005)。これらのことから鍵盤楽器を介して一対一のやり取りを行うことが重度知的障害のある子どもの表出行動を促進する上で有効であると考えられる。

II 目的

共有する活動としての音楽活動において、子ども

の情動表出、かかわり手とのやりとりの観点から、重度知的障害のある子どもの表出行動を促進させる条件を事例的に明らかにする。

III 方法

1 対象児

対象は、A 特別支援学校に通学する重度知的障害のある 14 歳の男子生徒 B である。表出言語はほとんどなく、かかわり手の手を引くクレーンハンド等直接的行動で要求を伝える。音楽活動においては、自分から楽しんで活動に取り組んでいる様子が見られるが、楽器活動等、長い待ち時間や、教師の目が離れた際には、教師の注意を引く行動が見られる。また、CD プレーヤーへの固執が見られた。

2 手続き

X 年 2 月から X+1 年 5 月までの 21 セッション中 10 セッションを抽出し分析対象とした。活動は週 1～2 回程度 B さんとかかわり手 C(筆者)とが、楽器(電子ピアノおよびキーボード)を介したかかわりを行う。かかわりの曲は、村井・堀合(1971)による歌曲分類を参考に選曲した。かかわりの方針として松井(1997)の「BED-MUSIC 技法」、Axline .V.M. (1947)の非指示的な立場の遊戯療法での「8 つの原理」を参考にした。

3 分析

以下の 3 つの視点から分析する。一つ目は、音楽活動における表出行動を徳永(2001)の「太鼓遊びで見られた行動」を参考に修正した分析カテゴリを接近行動と回避行動に分け分析し、1 秒を単位時間とし、単位時間における出現の有無を 1 回とし、表出行動の頻度を集計した。例えば、「笑う」という行動が 3 秒間続いたら 3 回とし、またボタンを 1 秒間に 2 回押す等、一つの行動が 1 秒間に 2 回見られた場合は 1 回としたが、ピアノを見ながら鍵盤を押す等、違う行動が見られた場合はそれぞれ 1 回ずつの表出とした。そしてセッションごとに活動時間が違うため、すべてのセッションを 500 秒に換算した。二つ

目は、音楽活動における情動表出を促進させる条件を、情動表出と思われる行動(笑う・興奮する・両手で鍵盤を押す)が記述されているエピソードから分析した。三つ目は音楽活動における相互作用の様相を伊藤・西村(1999)の相互作用成立水準を用いて明らかにした。加えてBさんの表出行動に関するエピソード記述から、楽器を介したA水準以上のやりとりが長く続いた場面を抽出し、相互作用を成立させる条件についてトランスクリプトから分析する。A水準とはA-IとA-IIに分類され、A-Iはかかわり手の行動に対象児が反応をし、その反応に対してかかわり手は反応するという相互作用がここで終了するか、その後も続くことを意味する。A-IIとは、逆に対象児の行動にかかわり手が反応をし、その反応に対して、対象児は反応するという相互作用がここで終了するか、その後も続くことを意味する。A水準以上のやり取りとは、さらに「かかわり手→対象児→かかわり手→対象児→」というように続いていく状態である。

IV 結果

図1・2に示したように、全セッションの中でもセッション9、10は、手による接近行動が増加しており、図2に示したように「ボタン操作をする」「鍵盤を指で触れる」「腕を解く」が増加傾向にある。また、セッション9、10では、「ボタン操作をする」が急激に増加している。接近行動の一つである「かかわり手に触れる」と回避行動として捉えられる「腕を組む」が全体的に減少傾向にある。

一番接近行動の多かったセッション9の表出行動を詳細は、図3に示したように、接近行動の項目で多いのは、「ピアノを見る」である。次いで多いのは「腕を解く」、「ピアノに近づく」、「かかわり手(C)の手を見る」で、「ボタン操作をする」、「かかわり手(C)に触れる」で、「かかわり手(C)の顔を見る」である。回避行動の項目で多いのは、「腕を組む」である。

つぎにBさんの情動表出と思われる行動があった場面で、「笑う」は、長調と短調の変わり目や曲終了後に多く、「興奮する」は、主にかかわり手が鍵盤操作した場合に多く見られた。「両手で鍵盤を押す」は、BED-MUSIC技法の反響技法が使用されていた。

最後に相互作用では8セッションまでが、かかわり手による働きかけとBさんの視線による相互作用

が多かったが、9・10セッションはかかわり手とBさんの手の働きかけによる相互作用が出現した。A水準以上のやり取りのエピソードには、

BED-MUSICの反響技法が使用が記述されていた。

V 考察

Bさんの表出行動については、接近行動が多く、回避行動が少ないことから、全体を通して、Bさんにとって音楽活動が意欲的な活動であったことが考えられる。接近行動の項目で多い「ボタン操作をする」「鍵盤を指で触れる」は、エピソード記述で見ると、回を重ねるごとに一回の操作時間が長くなっていることが推察された。「腕を解く」図1、2に示したように、全セッションの中でもセッション9、10は、手による接近行動が多く、情動表出・やり取りの記述がなされ、セッションを重ねるごとに活動に慣れ、積極的に手を出す様子が見られた。

図3で示された接近行動で多い「ピアノを見る」「腕を解く」「ピアノに近づく」「ボタン操作をする」は、ピアノに顔を近づけて、ボタンや鍵盤を操作している様子が記述されていた。

ボタン操作をする様子については、エピソード記述から一回の操作時間が長かったことがうかがえる。また、Bさんのボタンを操作したいという気持ちが表れ、それを明確にかかわり手に伝えようとしている様子が見られた。操作するボタンの中でもレバーを操作する様子が多く、機能を理解して操作している場面も見られた。

鍵盤操作の様子については、一本指で押す記述が多いことから、ボタン押すことと同様の感覚で鍵盤を押している様子が見られ、かかわり手を模倣しようとするやすぐにボタンを押してしまうという記述が多かった。しかし音楽活動の後半部では、かかわり手が鍵盤を押しているのを確認しながら、ボタンや鍵盤を押している様子が見られ、やり取りが成立していると推察された。

「かかわり手(C)の手を見る」は、かかわり手がピアノを弾いたり、ボタンを操作したりするのをよく見ている様子が記述されている。「ボタン操作」の表出が多かったことから、かかわり手のボタン操作をよく見て、自分も同じようにやってみようと考えていたように推察される。「かかわり手(C)に触れる」はとくに記述がないことから、かかわり手と触れて

いることに対しBさんが拒否していないと考えられる。「かかわり手(C)の顔を見る」は、視線を合わせるという記述もあったが、違う曲が流れてしまった場合にかかわり手の顔を見ることから、曲を流してほしいとの意図ではないかと記述されていた。

回避行動で多い「腕を組む」はエピソードに記述されていないが、ボタンを操作する以外は腕を組んでいたことが推察された。

次に B さんの情動表出と思われる行動で「笑う」が短調と長調の変わり目に多いのは、短調の部分に対し、気持ちが不安定になり、長調に変化した場合に安心から出現していると考えられる。またメロディが活動に見通しをつけ、安心感を与えていると考えられた。「興奮する」は主にかかわり手が鍵盤操作した場合に多く見られ、不協和音であり、B さんにとってはあまり聞きなれない響きであったからだと考えられる。「両手で鍵盤を押す」は、反響技法を使用し、B さんが出した音をかかわり手が模倣することによって、かかわり手を認識し、一緒に音を出しているという感覚が、より B さんの活動への積極性を高め、情動が表出されたと推察された。

最後に 9、10 セッションはかかわり手と B さんの手の働きかけによる相互作用が出現したことについては、子どもの側から意欲を持って行動を起こした際に、かかわり手が「反響技法」等を使用して行動を受けていくことで「音楽的対話」が成り立ったことが考えられる。このことから、音楽活動における表出行動を促進させる条件として①音を介した「音楽的対話」、②子どもの活動に対する意欲、③活動に対する見通しが立つという安心感、④沈黙が関与していることが考えられる。

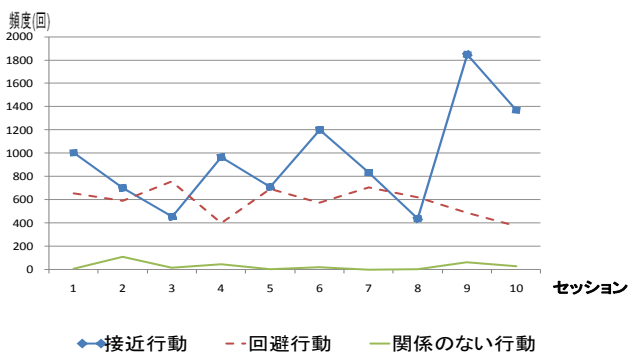


図1 接近行動と回避行動の推移

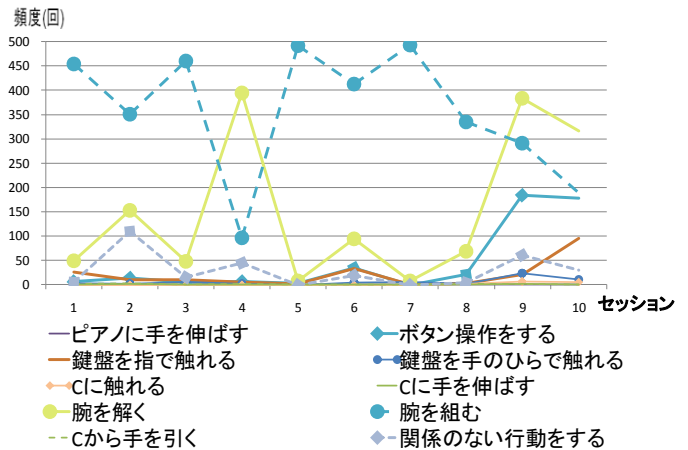


図2 手の表出行動の推移

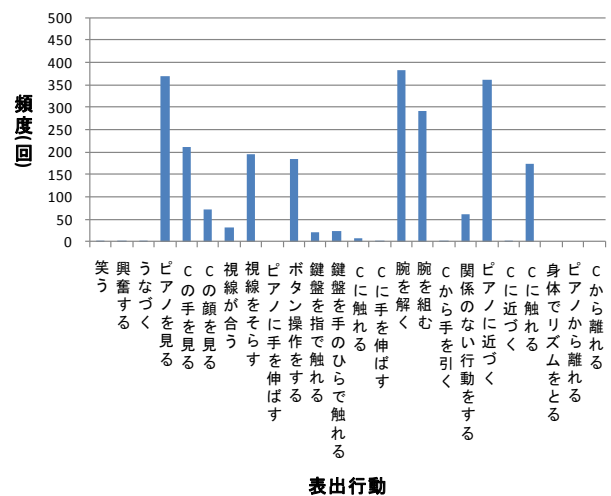


図3 セッション9の表出行動の詳細

文献

Axline.V.M. (1947) Play therapy, Boston: Houghton Mifflin, 小林治夫訳,1972,遊戯療法, 岩崎書店.
 伊藤恵子・西村章次(1999)自閉性障害を伴う子どもの相互作用成立要因に関する分析的研究. 発達障害研究, 20(4), 316 - 330.
 鯨岡峻(2001)養護学校は、いま—重い障害のある子どもたちと教師のコミュニケーション. ミネルヴァ書房.
 前川久男(2002)パーソナリティ・行動の特徴と適応, 梅谷忠男・堅田明義(編著), 知的障害児の心理学, 田研出版, 185-191.
 松井紀和(1997)音楽療法の実際—音の使い方をめぐって. 牧野出版.
 村井靖児・堀合牧子(1971)三年間の治療コーラスづくりの体験. 芸術療法, 85-91.
 高岡健(2007)Psycho Critique—サイコ・クリティーク 3—やさしい発達障害論, 図書出版(有)批評社.
 徳永豊(2001)自発的な動きの乏しい重度・重複障害児の対人的相互交渉の成立について. 特殊教育研究,38(5),45-51.
 遠山文吉(2005)知的障害のある子どもへの音楽療法; 子どもを生き生きさせる音楽の力. 明治図書出版.
 遠山文吉(2006)子どもの音楽療法における楽器活用の臨床的効果(1)—打楽器に焦点を当てて—. 国立音楽大学音楽研究所年報, 1-18.
 土野研治(2006)声・身体・コミュニケーション. 春秋社.
 土谷良巳(2006)重症心身障害児・者とのコミュニケーション. 発達障害研究, 28(4), 238-247.